

→脱走者(ある程度関係する)=警察への密告者ではないのである。これは我々の組織の経歴から言える。彼らは我々の矛盾者であるのである。カンパには応じてくれるのだ。また各種のブルジョア的々陥はだれでも持ってはいるし、直す意欲はあり(方法がわからなければ)教育と切傷の方法で解決していくべきもの。これらはマルクス主義の個人である。指導部にはこの観念が全くなかった。指導部の資格なし。またそもそも組織合同の基礎が誤っている。実践面では不十分で政治オーラのつかう政治路線一致以外は合同にはならない。昨年度夏の批判が全く理解されず第2の『野合』になったのがそもそもまちがいの。これが基になつて、組織強化のためとして人脈主義(結婚命令、官言)をとり、あやまりがあやまりを生み(当然矛盾は激化するばかり)とうとうリンチ殺人となつてしまった。合同事件の批判が根本的。

以上、まともさがありませんが

(1) 軍の質を高め(2) 理論をも養つていって(3) 組織合同し(4) 新党・高品質の下、ゲリラ戦を闘うという意図は評価できる。近い将来、現状では心算とされていることでありましたから。しかし段階を越えて何もかもやっしまさうという実践においては、ことごとくマルクス主義から外れ、それがつもりつもって、リンチ殺人という誤ちを結果として生じた。と考えているのです。

故連合赤軍14兵士氏名

大槻節子 (24)	遠山美枝子 (26)
尾崎充男 (21)	行方正時 (22)
金子みちよ (24)	早岐やす子 (21)
加藤能敬 (22)	西山茂徳 (21)
小嶋和子 (23)	山崎順 (21)
遙藤隆三郎 (22)	山田孝 (27)
寺岡恒一 (24)	山本順一 (28)

人民の軍隊には何か

「政党が自己の誤りに対して取る態度こそは、その党がどの程度まじめなのか、その党がじつこいその階級と労働大衆に対する義務を遂行しているかを批判する上で、最も重要、最も確実な方法の一つである。誤りを率直に認め、その理由を確かめ、つなげた条件を分析し、これを是正する方法を徹底的に討議することこそこれがまじめな党のしるしであり、その義務を遂行する方法であり、階級、さらに大衆を教育し訓練する方法である。」(レーニン『左翼小機関について』)

3・31人民集会報告

「人民の軍隊には何か」

我々は、赤軍派、日共革命左派の人々が真剣にこの問題に取り組み、武装闘争として日本階級闘争を発展させてきたことを知っている。しかしその血の結晶とも云うべき連合赤

軍は、果して人民の軍隊として、人民に奉仕する軍隊であったのか?

WKKKKは、涙をのんで、否、と答えねばならない。連合赤軍は、重大な誤りを犯した。

WKKKKは、階級矛盾と階級闘争の問題を正しく理解し、処理し、敵味方の矛盾と人民内部の矛盾を正しく区別し、処理しなければならぬ。60年代後半以降降つて来たWKKKKの教訓をもとに、確信を持って云えることは、WKKKKの進むべき道は、自らが武装することであり、武装することによって階級矛盾と階級闘争の問題を正しく処理して行くことであつた。そして、この困難な事業に先頭を切つて着手、結成されたのが連合赤軍であり、「互いに相手を盟友と認め合うことの勇氣」「団結のすばらしさ」を基調に、人民の武装を呼びかけ、WKKKKの進むべき道を大胆に突進して行つた。しかし、敵の死にもの狂いの弾圧によって人民との結合を阻まれていたとは云え、敵味方の矛盾と人民内部の矛盾を正しく区別し、処理して行くことに於いて、連合赤軍は重大な誤りを犯した。一たび、14人もの同志を殺してしまつたのか?

同志殺し—この問題は、60年代後半以降降つて来たWKKKKが一貫して引きずつて来た問題であり、WKKKKの内部の川上し性の露呈として、負困なる共産主義政治のあらゆる膿をしばり出した敗北の軌跡として、今回最も象徴的に現われた問題である。従つて、WKKKKは

重くのしかかるこの問題を、われわれの内なる問題として認識し克服して行かねばならない。具体的な問題の解明と並行し、赤軍派、日本共産党革命左派の人々一諸になって、彼らの自己批判を助け、そして二度にこのような誤りを犯すことのないよう、われわれは努力しなければならぬ。われわれは決して失望したり、絶望したりしてはならない。ましてこの問題を曖昧にし階級闘争から離れて行くことは、自らの権利を放棄することであり、もしそのような人が一人でも出るといふことは、敵の思うつぼにはまるものであり、われわれは決定的な敗北を喫することになる。われわれの進むべき道は、自ら武装することである。そして、「人民の軍隊とは何か」ということを、赤軍派、日本共産党革命左派の人々に真剣に考えることに努力しよう。それこそが死んでいった14人の同志たちに応えるたゞ一つの道である。

3・31ハイスマック二周年一銃撃戦万歳、故連日赤軍兵士追悼人民集会は、このような人民の考える、努力する場として、赤軍派、日本共産党革命左派の人々をはじめ、広範な人民の結集をもちこき、開催された。「連日赤軍の陣亡に敗北、そしてその誤りは、70年代の具体的な革命戦争へ転化・飛躍させるための生みの苦しみであった。私たちは、この事実を、明日の確実な勝利のための限りない教訓とし、更に前進するために、人民のみなさんの批判を仰ぎ、徹底して自己

批判せねばならない。その自己批判を徹底してやり切るため、私たちの自己批判に協力して欲しい。私たちは、死んでいった同志の共同墓碑を設立したい。そして二度にこのような誤りをくり返さないという、私たちの心の支えとしたい。」—赤軍派の同志のアピールは、如何に彼らが人民の軍隊建設のために努力して来たかを物語るものであった。

人民の言葉で、人民の生活を守り、人民の権利を獲得せんと前進する赤軍派、日本共産党革命左派の人々の自己批判運動を助けよう。そして敵権力の卑劣な階級闘争の矮小化、歪曲化攻撃のまっただ中で、広範な人民の結集のうちに、3・31集会を成功させた如く、われわれの不敗の階級闘争を、人民の歴史を前進させよう。われわれは、更に力強く歩もう。一歩一歩確実に、故連日赤軍兵士と共に歩め！

72.4.1 一日本赤色救援会一

家族問題に関する我々の見解

「人質になられた方には申し訳ありません。しんでお詫びできることではありませんが、死んでおわびします。あとに残った家族をどうか責めないで下さい。」
連合赤軍兵士、板東国男の父君は、こう言い残して自殺した。我々は思う、家族を悲しみと絶望のどん底におとし入れた権力のあくどい守口と、そしてそれ以上に権力の有形無形の強圧を何一つ有効にはね返すことのできなかつた我々の非力を。

今回の同志殺しは、我々に、己れの病の何たるかをイヤという程は、きりと教えた。その病の中の1つ。(家族帝国主義病)について考えてみよう。これまで我々は家族の問題を、個人的な問題、プライベートな問題として処理してきた。(実質的にはセリ捨ててきた) それゆゑ、家もあれば何となく解決できたような気になり、家族帝国主義をうち破れ、なほと平気で息まいてきたのである。しかし、こういう態度は、24時間的であり、1日も早く改めなければならぬ。怪怖になっている現実があるとしても、だからといって即ち敵とあるとするのは、あまりにも左翼小児病的な態度である。

このような人民と一丸になって、「人民の闘いとは何か」、「人民の武装とは何か」、「人民の軍隊とは何か」ということを考え、人民の創造的な闘いの中から、豊かな共産主義的政治を、みちびき出さなければならぬ。「人民の武装」の問題を、「人民の軍隊」として体現せんと闘い、敗北していった連合赤軍の人々を忘れず、「人民の暴力」奪還の歴史を忘れず、武装闘争の道をつぎ進むことがわれわれの任務である。今、連合赤軍の同志殺しに端を築き、われわれの戦線は、非常な混乱に陥り、武装闘争に失望して戦線から脱落したり、闘いを放棄したりしていく人々がいる。しかし、三里塚・忍草・沖繩・水俣などで闘っている人々は、決して自らの闘いを放棄することはないであろう。なぜならば、自分がどのようなところに生まれ、育ち、そして生きてきたかを闘いの出発点としているからであり、抑圧されるものとしての階級性に目ざめているからである。われわれは自らの階級性を、より多くの人民の生きて闘いにぶれる中から、身につけるべきである。現在、日本階級闘争においては、人民の暴力、即ち人民の武装や抵抗の概念はいちじるしく歪められたものとして存在している。しかし、日本人民はあらゆる手段を駆使し、自らを武装して国家権力と闘った経験があるのだ。この事実を、はつき